Shimotsuke English Journal (SEJ)

Vol. 58

R2.9.30

今月のキーワード　「思考・判断・表現」の評価　小・中英語授業研究

まもなく前期終了、小学校においては新学習指導要領の観点に基づいて学習状況を評価する時期になりました。特に【知識・技能】【思考・判断・表現】の評価のポイントについては、正しい解釈のもと、日々の指導と評価につなげていってほしいと思います。

前期は、感染症対策等で思うような言語活動ができずに、【思考・判断・表現】を評価するだけの十分な判断材料がそろわなかったことも考えられますが、改めて、単元計画のどのような場面（活動）で見取り、評価していくことができるのかを一緒に考えてみたいと思います。

【思考・判断・表現】を評価する学習活動

『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』（国研）では、話すこと［やり取り］に関する評価規準の設定例として次のように記載されています。

新しくやってきたALTのことを理解したり自分のことを伝えたりするために、（目的等）
自分や相手のことについて、（事柄・話題）
簡単な語句や基本的な表現を用いて、考えや気持ちなどを伝え合っている。（内容）

このように、評価規準では、目的、事柄・話題、内容　を明確に示すことが基本の形となります。

特に、目的を設定することが【思考・判断・表現】を評価する際に重要です。何のために伝えるのか、そのためにどのような工夫をするのか、子どもたちが主体的に考え、選択する場を与えましょう。

実際に、話すこと［やり取り］を目標とした例を見てみましょう。教科書で学んでいく際に、どのような言語活動が【思考・判断・表現】の評価につながるでしょうか。

■Lesson５　（I can run fast.）　P61→

＜展開例＞①P61　Activity ２（●できることをたずねあおう）
What can you do? ――　I can（　）.

★指導のポイント：

・「お互いのことをよく知るため」の活動であること（目的）を共有してから活動を行います。

→ 「お互いのことをよく知るため」の活動であるならば、１回（１ターン）の対話では終わらないはずです。

・「話し手」は「聞き手」を意識して（具体的に、相手の理解を確かめながら）分かりやすく伝えているか。「聞き手」は、「話し手」の意向や伝えたいことを（その場で聞き返したり、質問をしたりしながら）聞いているか、などが評価していくポイントとして考えられます。

「何のため」にやり取りをするのかを意識させましょう。そして、どんな工夫をしたかについて【思考・判断・表現】で評価しましょう。ジェスチャーやアイコンタクトは必要に応じて使うものです。目的にならないよう注意しましょう。

<展開例>② P63 Final Activity（●グループの中で、できることを発表しよう）
ワークシート「できることの木」を使って、グループで発表し合う活動。

★指導のポイント

・単元の終盤での活動でもあるため、「記録に残す評価」となることが考えられます。前時までの指導を踏まえて、どのような成長が見られたかを積極的に評価しましょう。

小・中英語授業研修

９月２８日（月）、市の小・中英語研修として東京家政大学の太田洋教授をお招きし、吉田西小学校にて授業研究会を実施しました。佐々木寛生先生（５年生担任）と ALT クラリス先生による、息のぴったり合ったティームティーチングの授業でした。

■Lesson５ （ I can run fast.）

〇ねらい：自分や家族のことを友達により知ってもらうために、特技などについて友達に伝えることができる。【思考力・判断力・表現力等】 話すこと［発表］

〇授業のポイントとなった場面

Small Talk の場面 既習の表現だけでなく、未習の単語なども使いながら、視覚的補助を入れて理解を促します。先生同士だけでなく、子どもを巻き込みながらのやりとりは、十分な英語によるインプット活動になりました。

グループ活動（発表）１→ 中間の振り返り → グループ活動（発表）２

発表者：I can do *kendama*. I can draw pictures. I can ride a unicycle.

（聞き手は、質問したり、リアクションしながら聞きます。）

１回目のグループ活動後、中間の振り返りで「できたこと」「できなかったこと」などを、クラス全体で共有します。そして、再度グループでの発表を行います。

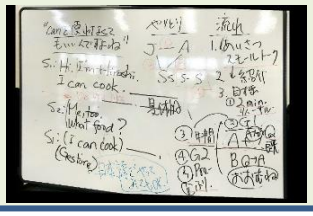
全体での発表場面 **２回のグループ活動（発表）を生かし、みんなの前で発表します。発表の機会を３回設けたことにより、自分の伝えたいことを堂々と言えるようになりました。聞き手も、リアクションだけでなく、質問が自然に出るようになりました。**

<太田先生講話より 抜粋>

キーワード：エンドプロダクト

・評価の基準 A/B に悩んだときには、具体的な子どもの発話例を考えてみる。どのような言葉を発することができれば「概ね満足」と捉えるか、教える側の基準を具体化しておくことが重要です。

B 基準の例 S1 :Hi. I’m Hiroshi. I can cook.
S2: What food?
S1: I can cook curry and rice.



Zoom での視聴もありがとうございました。

このような子どもの具体の姿（会話）をエンドプロダクト（End Product）と言います。

文責 学校教育課 稲葉亜希恵